

Prescriptive と Descriptive に関する一見解 ——*The Summing Up* 第八章を通して——

文学研究科英文学専攻博士後期課程満期退学

岡部 佑人

0. はじめに

この小論では、prescriptive（規範）とdescriptive（記述）について述べてみたい。英語学分野においては、prescriptive grammar（規範文法）とdescriptive grammar（記述文法）の用語があるが、prescriptive, descriptiveという語を再考する。考えるにあたり、Maughamⁱ の*The Summing Up*を題材として取り上げる。*The Summing Up*の第八章においてprescriptiveとdescriptiveが観察できることを述べる。観察を行い、この二つの立場から第八章を読み込めること、それに伴い、この二つの語を更に読み込めることを主張する。

本稿の構成は、まず、prescriptiveとdescriptiveの定義を示す（第1節）。次にprescriptiveとdescriptiveのそれぞれの事例を示し（第2節、第3節）、最後に、まとめを行う（第4節）。

1. prescriptive と descriptive の定義

COD (*The Concise Oxford Dictionary*) におけるprescriptiveの定義を記す。動詞形のprescribeを参考にする。prescribeはラテン語のpraescribereを語源に持つ。praeは‘before’の意味であり、scribereは‘write’の意味である。「前に」と「書く」という二つの意味が含まれるのがprescribe, prescriptiveである。「前に書く」ということから、予め書くことであり、英和辞典では「規則的な」や、「慣例の」という訳語となっている。前もって書かれた規則なので、どこか強いような、圧力を加えられる雰囲気がある。規則として決まっているために、内容を変更することはできない。

次にdescriptiveをCODで引く。動詞形のdescribeはラテン語のdescribereを語源に持つ。deは‘down’であり、scribereは‘write’であることがわかる。「下に」と「書く」という二つの意味がdescriptiveには含まれる。「下に書く」ので、あるがままに書き付けることを意味する。英和辞典では「記述的な」という訳語になる。

prescriptiveとdescriptiveのどちらも、scribere ‘write’を含むので、書くことについての

話を展開していくことになる。両者の違いは、prescriptiveが前もって書かれたことであり、descriptiveは実際に書かれたことである。prescriptiveには有無を言わせないような雰囲気がある。英文法の規則を学ぶ時などは、規則がある方が好都合である。例えば、“It’s I.”を見てみよう。主語の位置が主格の際には、補語の位置にも主格が来るという規則を定めると、“It’s I.”が得られる。既に模範解答を定めておくという考え方である。一方、descriptiveは実際に書かれた世界を取り扱う。“It’s me.”というように、補語の位置に目的格がくる例が、実際には存在する。規則を超えて、実際に書かれた世界がある。規則から離れるために、なぜ、そうなるのかという疑問が生まれる。そこでその疑問が一般的な研究対象になる。これがdescriptiveである。

まとめておくと、-scriptは書くことである。その書かれ方が異なる。前もって (pre) 書かれたのか、下に (de) 書かれたのか。定義を踏まえた上で、その定義に合致するような事例を観察し、検証を加えていく。

2. prescriptiveの事例

第2節、第3節では、Maughamが他者と交わった際に、どのような態度で向き合ったかを考察する。*The Summing Up* 第八章では、Maughamは二人から英語のレッスンを受けている。一人目は、若い秘書であり、prescriptive的である。この女性の例を第2節で取り扱う。二人目は、老齢の男性大学教授であり、descriptive的である。この男性の例を述べるのは第3節である。この両者を比較検証することで、prescriptiveとdescriptiveについて考察を加える。

それでは、第八章に登場する一人の若い秘書について述べる。彼女はMaughamが雇った臨時の秘書である。*Cakes and Ale* (1930) を書き終えた際に、文章の校正を依頼した。誤字や脱字程度の修正を依頼するつもりだった。しかし、彼女は大判の用紙四枚分の訂正箇所を作成した。話を聞くと秘書養成学校で文章講座を受講したという。白黒をはっきりさせる講師に教わったという。一定の方針があり、何かにつけて別の見方があるとは考えない。白黒をはっきりさせて規則を明確にすることはprescriptive的であるといえる。

(1), (2) は秘書が示した規則である。

(1) She had a feeling that you must not use the same word twice on a page. (20)

(同一の語を一頁に二度使ってはならないという考えを彼女は持っていた)ⁱⁱ

(2) His apt pupil [=she] would have nothing to do with a preposition at the end of a sentence. (20)

(彼の利口な生徒は、文章の最後の前置詞を容認しない)

これに対してのMaughamの行動が、(3), (4) である。

- (3) The two lessons I have had were given me so late in life that I am afraid I cannot hope greatly to *profit* them. . . . I thought that it would be silly of me not to *profit*, if I could, by the trouble she had taken and so sat me down to examine them. (19-20)ⁱⁱⁱ

(その二度のレッスンとも教わったのがずっと後のことで、文章が改善されたとは思えない…もし役に立つのに利用しないのも愚かだと思い直し、いったいどう訂正したのかを腰を落ち着けて検討しはじめた)

- (4) “I know. What have you come to see me about?” (*Cakes and Ale*, 146)

(「わかった。何をしにきたのか。」)

(1), (3) の引用は20ページからのものである。同じページに二度用いてはいけないという指摘のまさにそのページで、profitという同一語句を繰り返している^{iv}。また、(4) の*Cakes and Ales*においては前置詞aboutで終わる文章を書いている。ここから、Maughamは指摘を受け入れなかったことがわかる。彼女のprescriptiveな意見には従わないという表明をしている。しかしながら、同一語句を繰り返すことも、前置詞で文を終えることも起こりうるという意見もあろう。そこで、(5) を示す。(5) は更に明確な、皮肉さえ感じさせる文である。

- (5) When I had availed myself of the pleasant pause that is indicated by a semi-colon, she noted : ‘A full stop’ ; and if I had ventured upon a colon she remarked stingingly : ‘Obsolete.’ (20)

(セミコロンを用いて、文の間に一息入れようとすれば、「ピリオドに」とやられるし、思い切ってコロンの使おうものなら、「古くさい」とやられた)

意味内容は日本語訳に示した通りだが、(5) は日本語ではなく英語に着目することで実態が見えてくる。‘A full stop’の右側にはセミコロン(;)が用いられている。このセミコロンの前後で意味内容が分断されるのでそこで一息入れると、

- (6) [セミコロンを用いて、文の間に一息入れようとすれば、「ピリオドに」とやられるし]、
[思い切ってコロンの使おうものなら、「古くさい」とやられた]

このように書くことができる。この二文の接点として、セミコロンを用いている。セミコロンを使うなと指摘されたまさにその文で、セミコロンを用いている。これほど明瞭な形での抵抗はないのではないか。Maughamは意図的にこの文章を書いていると考えられる。

また、コロンは「古くさい」と言われながらも、Obsoleteの左側に意図的にコロンを置いている。コロンを置くことで、prescriptive的な彼女に対して抵抗を示しているものと思われる。

第八章の前半部分は、女秘書に対する批判が書かれている。表面上はそのように見える。しかし、実際には、女秘書本人の批判というよりはむしろ、prescriptiveに対する嫌悪感の表れではないだろうか。Maughamがprescriptiveに対する批判を持っていたと考えられるもう一つの例を示す。

(7) English grammar is very difficult and few writers have avoided making mistakes in it. So heedful a writer as Henry James, for instance, on occasion wrote so ungrammatically that a schoolmaster, finding such errors in a schoolboy's essay, would be justly indignant. (39)

(英文法は非常に難しいので、間違いをおかさずに書ける人はほとんどいない。例えば、非常に聡明な作家であるヘンリー・ジェームズ氏もよく文法上の誤りを犯した。学校で生徒のエッセーを添削する教師が見たら、怒り狂ったところだろう)

ここではJamesを引き合いに出している。聡明な作家でさえも英文法は非常に難しいものであるという指摘である。また、学校でエッセーを添削する教師が、prescriptive的であるということを暗に言及している。

一定の範囲内において誤りを指摘することは、訓練を受けていればさほど難しいことではない。なぜなら前もって答えが定められているので、それを知ればいいからである。若い秘書は訓練を受けた者としてprescriptive的に仕事を行った。その校正は秘書養成学校においては正しくとも、小説においては正しくない。このようにMaughamは意思表示を行っているのではないか。規範に照らし合わせるのではなく、実際に書かれた言葉を尊重すべきという立場を取っているのである。

3. descriptiveの事例

第3節では、書かれた言葉であるdescriptiveについて述べていく。老齢の男性大学教授がMaughamの自宅に滞在した際に、とある小説⁷の校正を申し出た。Maughamはその申し出を受ける。その校正の中で問題となった箇所を示す。

(8) I had written that a statue would be placed in a certain square and he suggested that I should write : the statue will stand. I had not done that because my ear was offended by the alliteration. (21)

(ある場所に像が置かれるだろう (statue will be placed) と書いたのを、像が建つだろう (statue will stand) とするように彼は提案した。それを避けたのは頭韻による音の重なりを嫌ったためであった)

the statue will standとthe statue will be placedのどちらが良いかという議論である。大学教授は前者を支持した。Maughamは、頭韻を避けるという理由などから、後者を支持した。Heはここで、suggestを用いている。実際の提案がどれほどの口調や雰囲気であったのかは知る由もないが、suggestを用いていることから控え目な主張だったと思われる。「答えはないけれども、こう考えたらどうだろうか」という大学教授の気持ちが伝わってくるようなやさしい書き方である。先ほどの女秘書のようなprescriptive的な態度は見られない。Maughamの書いた文に対して、頭韻規則で縛るのではなく、あくまでも実際に書かれた文を尊重する。このような態度はdescriptiveな態度である。この大学教授は規則の一点張りではなく、実際に書いた文を尊重している。

Maughamは、この大学教授のsuggestに感謝している。実際に大学教授への感謝が述べられている箇所もある^{vi}。結果的には、女秘書と大学教師が対比される。この対比は誰もが気付く性質のものであるが、更に読み進めて、prescriptiveとdescriptiveという語の対比で読み解くことはできないだろうか。そのように読んでいくと、第八章を深く読み込むことが可能となる。また、第八章以外にも、*The Summing Up*においてdescriptiveを尊重する発言があることを予測できる。そのような例は多く見られるが、ここでは二つの例を取り上げるにとどめる。

(9) As it is, I have had to teach myself. (22)

(結局、自分で学ぶしかない)

第九章の冒頭部分である。結局、人から規則に縛られて文章を書くのではなく、自分自身で書くということに対して責任を取らなくてはならないと表明することは、descriptiveの立場に立って考えているといえる。^{vii}

(10) It is necessary to know grammar, and it is better to write grammatically than not, but it is well to remember that grammar is common speech formulated. Usage is the only best. (39)

(文法を知ることは必要である。文法的でないよりは文法的である必要がある。しかし、文法というものは、皆が話している言葉を体系化したものであるということは覚えておくとい。慣用が唯一の基準である。)

実際に用いられている言葉を体系化して分類したものが文法であると述べている。分類よりも実際に使われている言葉が上位であるということが読み取れるために、ここでも Maugham は prescriptive より descriptive を支持していると考えられる。

4. おわりに

以上、*The Summing Up* の第八章を観察してきた。第八章は女秘書と大学教授の対比と読めるのだが、実際には prescriptive と descriptive の対比であると思われる。このような視点から眺めることで、この二つの語がより身近に迫ってくる。prescriptive が「規範的な」であることは辞書の情報であるが、テキストの人物を通すことで、prescriptive という語を更に知ることができる。prescriptive とはどのような人物を指すのか。どのようなものの考え方をするのか。規則の一点張りかあら一歩も外に出ずに考える人の姿が思い浮かぶ。前もって書かれたことを疑う必要があるということ、Maugham は間接的に示している。prescriptive と descriptive という概念と人物を同時に観察することでこのような読み方ができることを示してきた。ある概念の説明には、人物を用いた方がより理解しやすくなるという、ありふれた結論に行き着いたわけだが、このような結論は、語を理解する上でも、人間を理解する上でも最も大切なことであると考えられる。

参考文献

Maugham, William Somerset. (1930) 2000. *Cakes and Ale*. London : Vintage Books.

Maugham, William Somerset. (1938) 2001. *The Summing Up*. London : Vintage Books.

ⁱ Maugham, William Somerset. (1874-1965)

ⁱⁱ 本稿における例文は、記載がある場合を除き、全て *The Summing Up* (1938) からの引用である。括弧内の数字は該当ページを示す。

ⁱⁱⁱ イタリック体は著者による。

^{iv} 19ページと20ページならば、同一ページではないとの意見もあろうが、原稿の形に戻すと、この二箇所の profit の出てくる間は近いといえる。同一段落、約十行のうちに profit が二度観察される。

^v 「とある小説」は、調査の範囲内では明らかにされていない。原文では another book (21) と記されている。

^{vi} If I had had someone to guide me like the charming don of whom I spoke just now I might have been saved much time. (23) (あの頃に前章で述べた大学教授のような人がいてくれたら、時間を随分節約できただろう)

vii この一文は、第九章の冒頭である。Maugham自身が文章を学ぶ際に、様々な人に教えを受けたことが第八章を中心に展開されるが、そのどれもが有益でなかったということを受けて、諦めの言葉として用いている箇所である。

Prescriptive and Descriptive: in Chapter eight of *the Summing Up*

OKABE, Yuto

In this paper, we give a concrete description of the concept of prescriptive and descriptive in *The Summing Up*, which is a literary memoir by William Somerset Maugham, written when he was 64. It has miscellaneous topics such as travels, conversation, and philosophy. He suggests an idea : “Is there a universal truth in philosophy?” We think that if there is in philosophy a universal truth, we can say everything is predetermined. Things are decided by previous events or by people, which is called in this paper prescriptive. Prescriptive people tend to tell someone what they should do, rather than simply describing what is done. There is such a typical person in Chapter eight of *the Summing Up*. We will show you some examples of a person who seems to be a prescriptive person. Her attitudes form a sharp contrast the ones of a man in Chapter eight, who seems to be a descriptive person. He, Maugham thinks, is sensible and broad-minded. By comparing the woman and the man, we will consider the two words carefully.